

地域との関わり方を芸術士なりの視点で。

風景に囲まれたロケーション。私も同行させてもらった春の園外活動では、公涚公園、三木町にある太古の森、地域に古くから伝わる場所を訪ねるなどし、見て体験したことを取り入れていくつかの作品を制作した。

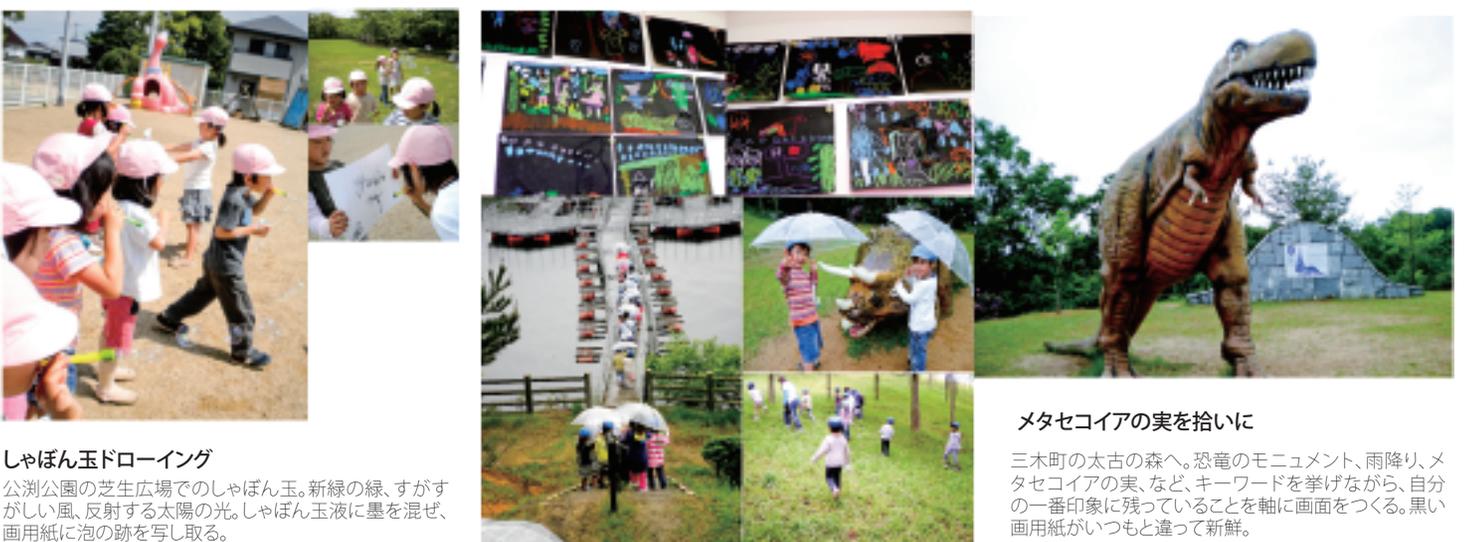
「地域との関わり」という大きなテーマは、私が保育園に初めて行った時からすでにあったもの。もうひとつ、「体験を個々の言語で言い換える」というテーマ。例えば、年長クラスで、太古の森の恐竜を描いた作品では、当日雨が降ってペアで傘を差したこと、大きな恐竜のオブジェ、メタセコイアの実、アップダウンの激しい地形、浮橋、などの要素を糸口に、フォーカスを絞って表現することを実践した。年中クラスでは、同じ行為は場を変えるとどのように感じるかということを中心に、公涚公園の広い芝生でしたしゃぼん玉を、お絵描きのツールとして利用した。また、年少クラスでは、地域の七福神の場所を訪れ、周囲の凹凸を紙に写し取り持ち帰った。体験をかたちにする行為には、おのずと個々と題材との関係が現れてくるものだ。二人でさした傘を主役にした太古の森の絵。しゃぼん玉の泡の跡の周りに、芝生の緑を描き加えた作品。こどもたちは、彼らなりの興味や印象を、ダイレクトに伝えようとしている。彼らのアンテナの電波をキャッチし、体験とつなげた作品作りが展開していけたらと考えている。

今、地域の文化祭に出品するために、これまでこどもたちが芸術士と一緒に触れたテーマや体験をひとつの絵にまとめる計画を実行中である。



凹凸を持ち帰る

七福神の祠周辺の木の幹、コンクリート、鉄格子、地面、石など凹凸を紙にこすりだして持ち帰った。こすりだした紙に、額をつけるイメージで切ったセロハンや折り紙などを貼り飾りつけをした。セロハンに初めて触れる子どもたちは、目にかざして色とりどりの世界を体験していた。違う色を重ねると色が変わることを見つけた子も。たっぷりと素材の魅力に浸っていた。



メタセコイアの実を拾いに

三木町の太古の森へ。恐竜のモニュメント、雨降り、メタセコイアの実、など、キーワードを挙げながら、自分の一番印象に残っていることを軸に画面をつくる。黒い画用紙がいつもと違って新鮮。

しゃぼん玉ドローイング

公涚公園の芝生広場でのしゃぼん玉。新緑の緑、すがすがしい風、反射する太陽の光。しゃぼん玉液に墨を混ぜ、画用紙に泡の跡を写し取る。